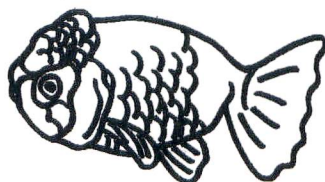


横浜キネマ倶楽部

第13回上映会

歓喜の歌

松岡錠司監督作品
(2008年／日本／112分)



「みなと合唱団」(東京)のコーラス
♪15:00～15:30

2008年12月7日(日)

[上映時間] ①13:00～ ②18:00～

[会場] 横浜市西公会堂

『歓喜の歌』

【ストーリー】

誰もが忙しく立ち働く12月30日。小さな町を揺るがすその大事件は、1本の電話から始まった。その電話に調子良く答えているのは、その場しのぎで人生を送っている文化会館の飯塚主任(小林薫)。こともあろうに、よく似たママさんコーラスグループ名を取り違え、大晦日の会場をダブルブッキングするという大失態をやらかしてしまっただけで、合唱にかけける彼女らの情熱を前に右往左往するばかり。さらには夫婦間の危機から、飲み屋のお勘定まで、日頃のツケが一気に回ってきて…。主任の運命は？懸命に練習してきたママさん達の歌声は？

【原作】

「今ももっともチケットが取れない落語家」として知られる立川志の輔の同名新作落語。現代の市井を生きる人びとの喜怒哀楽を、絶妙な観察眼ですくいとった数々の志の輔落語の中でも、とりわけ名作中の名作としてファンに語り継がれている作品である。ここ数年、映画やドラマの世界でも「落語ブーム」が言われているが、日本人の機微を描ききった「新作落語の世界観」自体を映像化する試みは今回が初めてだといえます。



【キャスト】

飯塚正……………小林薫
 五十嵐純子……安田成美
 加藤俊輔…………伊藤淳史
 松雄みすず……由紀さおり
 飯塚さえ子……浅田美代子
 北澤直樹…………田中哲司
 大田登紀子……藤田弓子
 塚田真由美……根岸季衣
 五十嵐恒夫……光石研
 「リフォーム大田」の客
 ……筒井道隆
 伊藤茂……………笹野高史
 大河原勇…………塩見三省
 大河原フク……渡辺美佐子

【スタッフ】

企画・エグゼクティブ
 プロデューサー…李鳳宇
 原作……………立川志の輔
 監督・脚本……松岡錠司
 脚本……………真辺克彦
 プロデューサー
 ……椎井友紀子
 音楽……………岩代太郎
 撮影……………岡林昭宏
 照明……………木村明生
 録音……………志満順一
 美術……………原田満生
 編集……………普嶋信一
 合唱指導……辻志朗

【本格コーラス映画裏舞台】

合唱が面白いのは、それぞれグループごとに発声が出るまで違い、そのメンツだから出せる「肉声」みたいなものが存在して、メンバーの何人か交代するだけで、サウンドもガラッと変わったりする固有の「声」があることです。『歓喜の歌』では、レディースグループは、奥さま風で上品な雰囲気、もう一方のガールズグループには結成間もないガチャガチャ感と下町風のチャキチャキ感という、2つのグループの「声のコンセプト」が決められています。

【キーワード】

♪1:「第九」 正式名は「交響曲第九番 ニ短調作品125」作者が青年時代に影響を受けたフランス革命の理念「自由・平等・友愛」が込められていることで有名。

♪2:日本人と「歓喜の歌」 「第九」第4楽章にて歌われる合唱曲。日本で年末に歌われるようになった理由としては「終戦直後の12月に日本交響楽団」(現在のNHK交響楽団)が演奏し人気を得て恒例化した。「楽園を渴望する歌詞が年末に相応しいから」などの諸説がある。

♪3:昨今のコーラス事情 全国の本格派グループ(JCA加盟)は約5000団体。「全日本おかあさんコーラス大会」には約700団体・2万人が参加。



○監督:松岡錠司 1961年 愛知県生まれ。

高校時代から8ミリを回しはじめ『三月』(81年)がぴあフィルムフェスティバルに入選。90年、望月峯太郎のコミックが原作の『バタアシ金魚』で劇場用映画監督デビュー。数々の新人監督賞を受賞する。2007年には『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』のヒットも記憶に新しい。人間の行き様を繊細かつ瑞々しく描く作風に定評がある。その他作品:『きらきらひかる』『トイレの花子さん』『私たちが好きだったこと』『ベル・エポック』『アカシアの道』『さよなら、クロ』

六本木ヒルズで「街なか映画館」を考える

塚田 豊

東京国際映画祭の真つただ中の10月23日、第5回の文化庁全国映画祭コンベンションが「住みたい街、行きたい映画館」と題して六本木ヒルズで開かれました。実質的な運営者は、私たちも加入しているコミュニティシネマ支援センターです。8月の仙台での全国コミュニティシネマ会議のシンポジウムと同様に、映画館を核とした中心市街地の活性化がテーマとあっては、横浜に「コミュニティシネマ（ミニシアター）」の再生を目指すキネマ倶楽部としては、見過ごすわけにはいきません。4人で参加しました。

赤いカーペット（今年は環境問題を意識して緑）にほど近い会場は、超高層の49階の国際会議場、韓国の方の講演はイヤホンによる同時通訳という初めての体験。なかなか落ち着きませんでしたが、テーマはい

ずれも「街なか映画館」、伊勢佐木町商店会のザキ座の活動に参加したり、野毛のにぎわい座の借用にアプローチして映画館造りを模索してきた私たちは、またもや大きな刺激を受けることができました。

韓国のミニシアター支援（多様性映画と呼んでいました）はまさに国家事業です。次は長野市の「相生座・長野ロキシー」のリニューアルプラン、私が30数年前の高校生時代、なけなしの小遣いはたいて初めて映画館の味を覚えた街です。

そしてお隣川崎市の「アートセンター」はまさに公設の（常時上映）映画館、行政の役割は大きい。堀越謙三さんの「ユーロスペース」移転は、ラブホテル街返上のための渋谷区ぐるみの街づくりプランの一環だと初めて知りました。

終了後は文化庁のおごり？のサンドイッチをパクつきながら交流会、横浜ではなかなか進まない「街なか映画館」に浸りきった半日でした。

「YOU AIN'T HEARD NOTHIN' YET！」

金子美佐緒

「お楽しみはこれからだ」は、『ジョルスン物語』（1946）の名セリフであり、和田誠著の本のタイトルでもある。私の映画の楽しみは、この本との出会いから始まったといえる。私が自ら選んで映画館に映画を見に行っただのは12歳頃、作品は『ペーパームーン』、『三匹荒野を行く』と記憶している。前者はTV「ペイトンプレス物語」でライアン・オニールのファンになったからであり、後者は大好きだったからである。それ以来主人公追っかけ型映画観賞と動物映画鑑賞を軸に映画館に足を運ぶことになった。和田誠の名セリフにつられ古い映画にもはまっていくわけでもあるが…。

当時から、もぎりの仕事にあこがれていた。高校時代友だちが馬車道の東宝会館でアルバイトをしていたのだが、ものすごくらやましかつたのを今でも鮮明に記憶している。いまや「もぎり」って何？という映画館事情になってしまったことが残念でならない。「もぎり」の存在を必要とする映画をつくり、自ら「もぎり」の仕事をしたかったのが「横浜キネマ倶楽部」参加のきっかけでもあった。映写、もぎり、チケット販売、ポップコーン売り、パンフレット・チラシ作りをオールマイティにこなせる「もぎり」をめざしたい。しかしながら現実には超厳しいもので、場所、資金、経営なるものを考慮すると、なかなか「覚悟」なるものではないのが本音である。

話は戻るが高校・大学時代は『タワーリング・インフェルノ』やら『大地震』やら『007シリーズ』やら月並みのハリウッド映画をみて、一方でわざわざ早稲田まで出向き『会

議は踊る』を見たり、おじいちゃんおばあちゃんと市民会館で『王将』を見て涙して一緒に行った友だちに苦笑されたこともあった。活弁士、松田春翠を生で体験できたことと、『カサブランカ』の字幕が2種類あること（「君の瞳に乾杯」と「君を見んが為」）を知っていることが、私の映画人生の密かな自慢である。

最近では映画を見る時間がとれずにいる。相変わらず主人公追っかけ型映画観賞と動物映画鑑賞が続いている。犬見たさに『ネバーランド』をみてジョニー・デップが好きになり（映画の後半までジョニー・デップであることに気が付かなかったのだけど）、しばらくはDVD（以前のように映画館での特集はありえないので）で追っかけをすることになるであろう（苦笑）。

映画館作りはなかなか実現しないけれど…。「お楽しみはこれからだ」！！



次回上映会のお知らせ

「赤い風船」 Le Ballon Rouge 1956年/仏/36分

監督・脚本:アルベール・ラモリス/出演:パスカル・ラモリス他

ある朝、少年パスカルは、一個の赤い風船が街灯にひっ掛かっているのを見つけた。街灯によじ登って風船を取ると、どうやらその風船には意思があるようで…。



「白い馬」 Crin Blanc 1953年/仏/40分

監督・脚本:アルベール・ラモリス/出演:アラン・エムリー他

南仏のマルグの荒地に野生馬の一群が棲息していた。群れのリーダーは、“白いたてがみ”と呼ばれる美しい荒馬で、地元の牧童たちは何とかして捕らえようとしていたが、逃げられてばかりいた。しかし、少年フォルコだけは、“白いたてがみ”と心を通わせ…。

日時:2009年3月20日(金・祝) ①11:00 ②14:00 ③17:00

会場:神奈川公会堂(JR東神奈川駅徒歩4分/京急仲木戸駅徒歩4分/東急東横線東白楽駅徒歩5分)

1956年に生まれたアルベール・ラモリスの『赤い風船』は、その年のカンヌ国際映画祭パルム・ドールをはじめ数々の映画賞に輝きました。しかし、不朽の名作の地位を得ながらも映画そのものは観る機会が限られ、その存在だけが語り継がれる伝説の映画であったのです。

2007年カンヌ国際映画祭。長年の権利問題が解決し、デジタル・リマスターによって鮮やかに甦った『赤い風船』は、1953年カンヌ国際映画祭

でグランプリに輝いた同監督のもう一つの傑作『白い馬』と共に再び出品されました。同じ作品の二度の正式出品自体、映画史上初の事件でした。なにより話題をさらったのはその少しも色あせない映画の力だったのです(二度目は監督週間出品)。

シンプルなストーリーとわずかなセリフにも関わらず、そこに描かれる愛、友情、喜び、切なさが心に強く迫ってきます。そして導かれる奇跡のラストシーンには感動し、心が揺さぶられることでしょう。

横浜に映画ファンの思いが反映される映画館をつくろう

(横浜キネマ倶楽部)は、横浜で永年親しまれてきた映画館の相次ぐ閉館を惜しむ映画ファンが集って、2005年5月に発足しました。「横浜に映画ファンの思いが反映される映画館をつくる」ことを目標に掲げ、これまでに12回の上映会を行ってきました。上映会場には多くの映画ファンにお集まりいただくとともに、励ましの声も多数寄せられ、大いに勇気づけられています。

(横浜キネマ倶楽部)は、これからもねばり強く活動を続けていきます。夢の実現に向かって一緒に活動しませんか。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第1回『美しい夏キリシマ』 第2回『パッチギ!』 第3回『カーテンコール』 第4回『二人日和』 第5回『ゆるる』
第6回『トリノ24時からの恋人たち』 第7回『長い散歩』 第8回『天空の草原のナンサ』 第9回『イノセント・ボイス
—12歳の戦場—』 第10回『モーターサイクル・ダイアリーズ』 第11回『恋するトマト』 第12回『シッコ』

横浜キネマ倶楽部

〒231-0012 横浜市中区相生町1の15 第2東商ビル4階—C

労働市民法律事務所 気付 TEL/FAX 045-332-2837